

# 関西学院大学 研究成果報告

2020年 3月 11日

関西学院 院長殿

所属： 法学部  
職名： 教授  
氏名： 門田修平

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国： ） <input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国：アメリカ合衆国） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間
研究課題	第二言語習得におけるシャドーイング・音読の効果および第二言語のメンタルレキシコンについての心理言語学・応用言語学研究
研究実施場所	ニューヨーク大学（米国ニューヨーク市）
研究期間	2019年 9月 20日 ～ 2020年 3月 17日（ 6 ヶ月）

## ◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

「第二言語習得における、(1)シャドーイング・音読の効果および、(2)第二言語のメンタルレキシコンについての心理言語学・応用言語学研究」という主に2つのテーマで研究を行った。

(1)第二言語におけるシャドーイング・音読については、当初、次の2つの課題の解明を目指すのが目的であった。

音読とは、書かれた単語や文、文章などの「書き言葉」を、音声言語すなわち「話し言葉」に置き換えて発音するタスクである。これに対してシャドーイングは、聞こえてきた音声をそのまま声に出して発音するタスクである。対象となるインプットは、音読が視覚を通じて見た文字言語であるのに対し、シャドーイングは聴覚を通じて聞いた音声言語である。ともに、こころ（頭）の中でどのような発音であるかを認識し、その後、その認識した音を発声（発音）する。なお、頭の中で言葉の音を認識することを「音韻表象の形成」と呼ぶ。

第二言語習得研究では、これまでに、異なるアプローチからの実証的・理論的研究が行われ、実にさまざまな立場からの議論がなされてきました。その中で、筆者は、それらを総括して、外国語（第二言語）習得を成功に導くのはIPOM、すなわち①インプット処理（I：input processing）、②プラクティス（P：practice）、③アウトプット（O：output production）、④（メタ認知的）モニタリング（M：monitoring）の4つのキーポイントで

あることを提唱している。そして、これら4つのポイントとなる学習を支え、それらの学習を促進するのが、「シャドーイング」「音読」のトレーニングであると結論づけられる。すなわち、以下の4つである。

①外国語教育学者のクラッシェン (S. Krashen) が提唱した「インプット理論」が示すように、大量かつ平易なレベルのインプット処理 (リスニング、リーディング) が外国語習得の大前提である。なお、インプット理論とは、学習者の学カレベルよりも若干上回るレベル (i+1) のインプットを最適とする理論。

②しかし、言語教育学者のスウェイン (Swain) が提唱した「アウトプット理論」が明らかにしているように、インプットの理解だけでは第二言語の十分な習得には至らず (聞いて理解できても正確に話せない)、話す・書く・インタラクションなどのアウトプット活動が不可欠である。

③アウトプット (インタラクションを含む) のためには、両者をつなぐ、流暢性の向上を目指したプラクティス (シャドーイング・音読) による自動化、手続き化がその前提であり、特に日本人英語学習者のように、学習ターゲット言語である英語と母語の日本語の間の言語間距離が大きい場合に重要である

④自身の学習状況を観察して調整するメタ認知的活動 (モニタリング) が大切である

以上の①から④のポイントにシャドーイング・音読がどのように関連しているかについて、これまでの研究成果や理論考察にもとづいて、次のように提唱している。

①シャドーイングが英語のリスニング力を、音読が英語のリーディング力を伸長させ、インプット処理を促進する効果を持つのは、リスニング・リーディングの最初の段階である音声知覚や音韻符号化が、鍛えられることがその理由である：インプット効果

②シャドーイング・音読は、話す・書く・インタラクションを含むアウトプット活動 (特にスピーキング) における、最初のメッセージ形成段階を除いた、他の諸段階をシミュレーションする効果がある：アウトプット効果

③聞いて理解した語彙・構文などの学習項目や意味内容を、自身でも発話 (スピーキング) できるレベルに引き上げるには、インプット処理とアウトプット産出をつなぐことが必要であるが、このためのプラクティスとしての効果がシャドーイング・音読にはある：プラクティス効果

④自身が発声している音声、好むと好まざるに関わらず聞こえてくるシャドーイング・音読タスクは、そのまま学習に必要な聴覚フィードバックの機会を与えてくれるものであると言える。したがって、自身の学習状況を観察して調整する、(メタ認知的) モニタリングを促進する効果が期待できる：モニタリング効果

私たち日本人英語学習者が抱える最大の問題点は、読んだり書いたりはある程度できるが、聞けない・話せないという音声処理・文字処理能力の乖離があると従来から言われてきた。音声処理能力と文字処理能力の双方向性を確立し、それをアウトプット (スピーキング) することが、シャドーイング・音読の主要なトレーニング目標であることを、今回の留学中の研究において、再度実証的にあきらかにすることができた。

(2) 第二言語のメンタルレキシコン（心内辞書）については、開発途中のCELP-Comテストと実行系ワーキングメモリとの関連についての研究である。

まずCELP-テスト（Computer-Based English Lexical Processing Test：コンピュータ版英語語彙処理テスト）とは、第二言語処理の自動性（流暢性）を、語彙処理について測定するテストとして開発されたものである。その最新版が、より負荷の高い語彙処理テストをめざして開発されたのがCELP-Comテスト（Computer-Based Communicative English Lexical Processing Test）である。

このテスト手順は、次の通り。

①まず（ ）を含んだ文が提示されるので、その文の（ ）以外の文脈の意味を理解して、覚えておく。

②次に、文が消えて、ターゲット語が提示されるので、その語が先の文の（ ）に入るかどうかYes-noで判断する。

③そしてその語を、音韻的ワーキングメモリに保存しておき、次に提示される語と意味的に関連しているかどうかを、再度Yes-noで判断する。

2段階のYes-noの反応は、まとめると、次の4つのパターンがある。

(a) Yes - Yes反応

例：He quit his job since he is seriously ( ). ill => sick

(b) Yes-No反応

例：The recent natural disasters made Nancy very ( ) about the environmental issue.  
conscious => electric

(c) No - Yes反応

例：We traveled such a long distance that we were ( ). large => big

(d) No - No反応

例：Mary liked the place a lot because she was quite ( ). gold => kitchen

(a) (b)のYes反応では、文脈の意味と単語の意味が適合しているので、音韻的ワーキングメモリで意味文脈とターゲット語を保持していればそれで十分である。

ところが、(b) (c)のNo反応では、文脈の意味と単語の意味は相反しているので、音韻的ワーキングメモリを制御する実行系ワーキングメモリ能力が必要になる。ワーキングメモリの実行機能を駆使して、後の単語の意味関連性の判断に向けて、文の不必要な意味文脈を「抑制」し、同時にターゲット語の意味への注意を意識的に「維持」する必要がある。

CELP-Comテストは、「言語処理」という同一のドメインで、「音韻的ワーキングメモリ」と、それを制御・コントロールする「実行系ワーキングメモリ」の能力測定のためのテストになることがあきらかになった。このことは、同時に、学習者の実行系ワーキングメモリを鍛えるトレーニングとしても活用できる可能性を示唆している。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。